

## 「学習意欲」アンケート調査結果

理数検定研究所  
(協力：日本理科検定協会)  
2016年10月9日

高等学校489校中意見を書いてきた学校は376校

解説（376校について）

「学習意欲」を引き出す（高める）方法は？の問いかけに対し何らかの意見・考えを記載いただいた内容をまとめてみました。

- 1 アクティブラーニングが「学習意欲」の向上に役立つとした高校は意外に少なく、ディスカッションをさせているという高校を入れても7校に過ぎなかった。  
流行に流されない高校教育現場の教育観が伝わってくる。
- 2 「学習意欲」の向上に努めて日々試行錯誤を重ねているところで、具体的方策があれば教えて欲しいとしている学校が9校あった。  
教育現場の苦労の様子が想像できる。
- 3 「学習意欲」を引き出すとした解釈ではそれが学生に内在していると捉えた見方であり、これに対し、「学習意欲」は高めることができるものとした解釈ではそれが指導によって向上させることができるとした解釈である。結果は同じであるが指導者の教育手法の違いによって表現解釈が異なるが、ここでは深入りしない。
- 4 「学習意欲」の向上について、これを教育現場側のテーマであるとした内容についていくつか紹介いたします。
  - ①教師の資質向上・生徒との信頼関係
  - ②授業力
  - ③魅力ある授業・思考をゆさぶる
  - ④目標意識をしっかりと持たせる・できるところからの積み上げが大切・できた事を評価
  - ⑤教材の準備・指導法の研究
  - ⑥生徒に夢を持たせる・その体験等を重視する
  - ⑦教育目標・学習目標の明確な設定
  - ⑧生徒の学習状況を把握、的確な評価・学習目的の明確化・課題解決への導き
  - ⑨知ること＝面白い を感じさせる指導
  - ⑩受身的な学習だけではなく、まわりの生徒と話し合ったり、作業や実験など実物に触れることなど興味・関心を高める。ただし、理系においては意欲だけでなく、スキルがな

いと学習意欲は保たれない

- ①指導の動機・目的・目標の設定
- ②生徒が興味を持てる授業展開、理系の場合は実験・実習を増やすこと
- ③早期の進路目標を持てるように指導、意欲の高い集団、がんばる集団づくり
- ④産業社会と人間などの充実したキャリア教育
- ⑤身の周りに潜む学問上の真実を紹介する。正解する、理解する喜びを積み重ねる。
- ⑥授業法の変更・変革、学校全体の雰囲気づくり
- ⑦一体感のある双方向授業の実践、興味づけ
- ⑧解りやすい授業・ほめる授業・細やかなプラス評価
- ⑨教科内容に興味を持たせる、学習による成果が実感できるようにする
- ⑩教師が生徒を惹きつける授業を工夫する、方法は様々、生徒に問題意識を持たせ自ら問題解決する機会を与える
- ⑪生徒に自信をつけさせる・
- ⑫明確な目標設定、生活習慣の確立
- ⑬つまづいたところにすぐ戻ることができる学習環境を整える
- ⑭自ら学ぶ環境づくり、難しい内容を理解していく環境づくり
- ⑮進路目標の明確化、生徒の興味関心を引く授業展開、検定の活用、文化部の活性化

5 「学習意欲」の向上を学生に求める意見を紹介いたします。

- ①進路意識をもたせる
- ②将来のこと（生涯賃金など）を考えさせる
- ③「分からなかった内容・問題が分かるようになったし、できた」という成功体験
- ④本人のモチベーションを本人自らがあげる
- ⑤自分で「理論」「アイディア」「仮説」を考え出す経験を積む
- ⑥知る・分かる喜びを体感してもらう
- ⑦個々の目標の明確化

## 6 解説

理科・数学の充実が求められる基礎・基本を希求する高校教育現場を「学習意欲の向上」というキーワードでアンケート調査させていただきました。

新しい学力観として基礎・基本の教育は理科・数学にあるとして教育内容、指導の体制を整えるべく文部科学省をはじめ各教育機関は、幼・小・中・高・大連携教育改革を実行に移している。

大学入試センター試験のマーク式選択試験の改革は記述重視の評価システムの開発を喫緊の課題として、国際対応の教育システムは小学生の英語教育とWeb知識技能の充実を急いでいる。

このような情勢を背景として比較的遅れているとされる高校教育の改革は義務教育と大学教育の狭間で多くの不合理が具象化しつつある。

いわゆる進学校と称する学校群は一般社会の高いニーズを背景に、進学に有利となる教育効率を追求することに腐心することになる。一方、学習意欲の低い大学進学層ではない生徒が、単なる大学の生徒不足を補充する経済ツールになっているのである。

そして、大学にあっては学生の基礎学力保証もままならない状況でも、人手不足の企業群にとっては売手市場になっている日本社会の最大の人的危機問題に直面しているのである。

## 7 抽象的問題の解決策

日本の人的危機問題を抽象化して観ると、「学習意欲」というテーマが浮上する。日本の現在そして未来の基礎基本の課題は学習者・教育界・経済界・世界を「学習意欲」というキーワードで連結することにある。

「学習意欲」の高い外国人を日本に迎え、「学習意欲」の高い人を海外に出す。

企業は「学習意欲」の高い人たちを雇用し、「学習意欲」の高い人たちを大学に導くことである。

味や臭いさえ数値化できている時代に、「学習意欲」がその指標もなく数値化もできない対象だと考え難い。日本の教育界は人の「学習意欲」を指標化する研究に最大の予算と人材を確保して新しい学力観に基づく対策の実現に踏み切ることが最重要・喫緊の使命である。

大学センター入試に代わるシステム開発などはごく小さな課題であり、そんなものは民間や各大学に任せてもいいから、「学習意欲」の指標化システムの開発に乗り出すことが重要ある。

幼児の「学習意欲」は生々しくももの凄い。これがヒントである。幼児の「学習意欲」の次に凄いものは高齢者の生きる力である。

幼児の「学習意欲」は幼児の生きる力そのものであり高齢者の生きる力とリンクしている。そういう意味で生涯活動の概念は重要だ。

厚生労働・経済産業を束ね日本の未来を託す取り組みに日本の予算の半分を充てても、十分に余りある、価値ある「学習社会」の実現を目指すべきときが来ている。世界のリーダーたる地位を築くべきときが来ているのである。そして、教育界では高校教育現場がその鍵を握っている。

2016年10月9日

高田大進吉